

基礎看護学実習Ⅱにおける実習過程に伴う看護学生の思い — 達成動機が高まった学生を対象とした調査から —

岡田 初 恵¹, 榎 本 朋 子¹

Nursing Students' Thoughts in Clinical and Practical Training of Fundamental Nursing II : The Result of a Survey about Students Who Improved Achievement Motivation

Hatsue OKADA¹ and Tomoko MASUMOTO¹

キーワード：基礎看護学，実習，過程，達成動機，看護学生

概 要

達成動機が高まった学生の実習過程とそれに伴う思いを明らかにするために、3年課程の看護学生を対象に、基礎看護学実習Ⅱ前後に達成動機尺度を用いて達成動機を測定し、達成動機が上昇した学生に面接調査で得たデータにフローチャートを用いて分析した。

その結果、①自らの疑問や課題への取り組みへの成功体験による看護師志望と学習意欲、②指導者の言葉による思考の促進、③自分自身の看護実践に対する客観的自己評価、④患者イメージ変化に伴う看護対象者への興味、⑤対人関係不安の消失により安心した中での優れた看護実践の学びによる看護観の変化、⑥未解決課題への前向きな解釈、の6要素があることが明らかになった。

学生の達成動機を高める実習のために、学生の関心事と希望する学習方法の把握、実践に対する学生の客観的分析と課題の認識、学生・患者・看護師との人間関係と阻害因子の有無に留意して指導する要性が示唆された。

1. はじめに

達成動機（価値ある仕事に挑戦し、それを成し遂げたいという欲求）が高い人は、課題遂行能力が高い¹⁾とされていることから、達成動機を高めることは学習活動能力を高めることにつながるといえる。達成動機を高めるには、その要因を促進する必要があるが、森田ら^{2,3)}は、看護大学生の調査から看護学生としての誇りの有無や看護師の仕事のやりがい意識、看護師は尊い仕事であるという看護職の価値づけと、一生役立つ知識や技術を修得すること、仕事を通して人間的に成長すること、社会へ貢献することなどが影響要因であったことを報告している。このことは、看護師への志望動機が達成動機の影響要因であることを示している。

しかし、近年の看護学生の入学志望動機をみると、

上記の達成動機の影響要因と同じような「人のためになる」「やりがいがある」といった積極的動機での志望動機がある一方で、近年の青少年の自我の発達の遅れ、少子化、高等教育機関への進学率上昇も影響してか、ただ何となく、人に薦められて、経済的安定、就職に困らない、といった消極的動機での進学者がいる⁴⁾。こうした学生は、学習活動を支える内発的動機づけを構成する欲求の一つである自律や自己決定への欲求⁵⁾に乏しいということでもあり、達成動機が低く、課題遂行に困難を生じる可能性がある。したがって、このような学生には内発的動機づけにつながる事象（きっかけ）を与えていくことが必要であると考えられる。

そこで、そのような事象を看護学基礎教育のなかでどう提供していくかが問われるが、渡邊ら⁶⁾は、その場面として初めて受け持ち患者を持つ基礎看護学実習で、看護師として必要な能力や学習への動機づけを学んでいたことを報告している。このことは、受け持ち患者を持つ臨地実習が学習活動への契機の一つであることを示している。

さらに、成功に対する自己の達成動機の表現は個々

(平成23年10月19日受理)

¹川崎医療短期大学 看護科

¹Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

人において異なっているため、成功という結果のみを重要視するような達成動機は、競争的達成への欲望となってしまう恐れがあることから、達成動機は結果だけでなく過程（プロセス）を重視する必要性が提唱されている²⁾。このことから、達成動機の変化の過程に注目し、その過程に伴った学生の思いを明らかにすることは意義深いと考える。

以上のことから、学生が初めて受け持ち患者を持つ基礎看護学実習Ⅱ終了後に達成動機が上昇した学生は、どのような実習経過とその経過に伴う思いを抱いたのかを明らかにしたいと考えた。そして、教育者がより効果的な実習過程の提供に努め、学生の達成動機を高める思いが促進できれば、前向きに看護職を目指す学習活動につながるのではないかと考え、本研究に取り組んだ。

2. 研究目的

基礎看護学実習Ⅱにおいて達成動機が高まった看護学生の实習過程とそれに伴う思いを明らかにする。

3. 用語の説明

1) 達成動機

達成動機とは、堀野⁷⁾が述べている「社会的・文化的に価値あるものおよび社会的・文化的に価値が認められていなくとも、個人的に重要である積極的価値のあるものを成し遂げたいという欲求」とする。

この達成動機の強さを測定するのが達成動機測定尺度⁸⁾であり、自己充實的達成動機（他者・社会の評価にはとらわれず、自分なりの達成基準への到達をめざす達成動機）と競争的達成動機（他者をしのぎ、他者に勝つことで社会から評価されることを目指す達成動機）の2側面⁹⁾からなる妥当性・信頼性が検証された23項目7件法で構成された尺度である。

2) 基礎看護学実習Ⅱ

基礎看護学実習Ⅱとは、「基礎看護学などで学んだ理論や方法を臨床場面において体験し、健康障害を持つ患者の日常生活援助を通して看護の基本となる知識・技能・態度を学ぶことを目的とした1学生が1患者を受け持つ実習」で、2年次の11～12月に全学生を2期に分け、前半か後半のどちらかで各学生は2週間、病棟で実習する。実習では、日常生活援助を中心とした看護技術を実践しながら、看護過程についても体験し、看護上の問題に気づくための情報収集までを行う。また、患者、家族とのコミュニケーション技術および医

療人としての基本的態度も体得する。

なお、臨地実習としてはこの前段階として1年次1月に基礎看護学実習Ⅰがある。実際の看護の場を見学体験することにより看護職の役割機能をイメージ化し、臨地実習での学習の重要性を動機づけることを目的に1週間実習している。実習内容は、病院内の薬剤部や栄養部といった各部門の見学と病棟の看護師について看護援助の実際を見学している。

本研究で「実習」と記述されているのは、基礎看護学実習Ⅱを示している。

3) 思い

思いとは「学生の実習前から後を通して、実習経験から派生して心に浮かんだり考えたりした気がかりや気に止まっていること」とする。

4. 研究方法

1) 研究期間

2008年10月26日～2009年1月31日

2) 対象

看護短期大学3年課程で基礎看護学実習Ⅱを履修する2年生108名中、本調査に協力の得られた学生97名の有効回答者81名のうち、実習前に比べ実習後に達成動機が最も上昇した上位10名を面接調査対象とした。この10名は、2名の調査者で実習後の学生の記憶が鮮明なうちに面接調査と分析が可能な人数を検討し決定した。

達成動機の測定は、実習開始2週間前と実習終了後2週間後に達成動機測定尺度を使用した自記式質問紙を配布し、留置法にて回収した。結果は表1の通りである。面接調査学生の実習後の達成動機は、17～19点/人と全員上昇していたが、paired t-test（危険率5%）SPSS（Var.14.0J）で、有効回答学生の実習前後の変

表1 実習前後の達成動機の平均値

達成動機	調査時期	有効回答学生 n = 81	面接調査学生 n = 10
自己充實的 達成動機	実習前	71.25 (9.74)	71.40 (8.40)
	実習後	70.17 (9.90)	77.80 (8.65)
競争的 達成動機	実習前	43.33 (8.55)	44.20 (8.53)
	実習後	43.57 (7.73)	50.30 (5.35)

() 内は標準偏差

化と比較したところ、自己充實的達成動機は $p = 0.952$ 、競争的達成動機は $p = 0.052$ と有意差はなかった。

3) データ収集方法

調査対象者に、実習終了1ヶ月目頃、面接法を用いて、実習前・中・後の順に、実習経験やその時に抱いた思いについて、振り返りながら話してもらった。一人当たりの面接時間の目安は30~75分/回で、面接回数は1~2回行った。面接の際には語られた内容をメモするとともに録音し、収集したデータは面接後逐語記録として文字化した。

4) 分析方法

収集したデータから各調査対象者の実習過程に沿って経験した内容とその時の思いを抜き出しながら、個別にフローチャートにした。その後、経験や思考で共通する点は統一化しながら、さらに10名全体でのフローチャートを作成した。その中の関連事項と抱いた思いの要素に命名し、質的帰納的に分析した。

5) 倫理的配慮

調査対象者に、研究内容を口頭、文書で説明し、研究協力の意志は、研究同意書の提出により確認した。説明に際しては、研究への参加は自由であり、この研究への参加の有無が成績などの評価とは関連しないこと、研究参加に同意した後であってもいつでも研究への参加は取りやめることができ、それに伴う不利益もないことを伝えた。

本研究では、調査対象の選出として達成動機測定尺度において実習前後で達成動機が高まった人に面接する必要があったため、達成動機尺度の回答時に学籍番号を記入してもらうが、これは面接調査対象者の抽出のためのみに使用されることを約束した。

面接調査は、実習において指導担当をしていない調査者が個室で行い、対象者の許可を得て録音した。面接後は、すぐに逐語録として文字化し、収集したデータの個人が特定されないように配慮した。

なお、本研究は、川崎医療短期大学倫理委員会の了解を得て行った。

5. 結 果

達成動機が上昇した学生の実習過程およびその過程の中での学生の思いとその要素に命名した結果を図1に示す。

10名全体での関連事項と思考からその要素に命名した結果、①自らの疑問や課題への取り組みへの成功体

験による看護師志望と学習意欲、②指導者の言葉による思考の促進、③自分自身の看護実践に対する客観的自己評価、④患者イメージ変化に伴う看護対象者への興味、⑤対人関係不安の消失により安心した中での優れた看護実践の学びによる看護観の変化、⑥未解決課題への前向きな解釈の6つの要素が得られた。以下の文中の()内の数字は図1の語句の位置を示す。

① 自らの疑問や課題への取り組みへの成功体験による看護師志望と学習意欲

実習中、学生は「患者が『歩く気にならない』と言う」「患者が前日できたことができないのはどうしてだろう」といった「患者を観察したり援助したりする中で学生が気がかりになった疑問や困ったこと(1)」や「患者の自分の病気に対するネガティブな発言(2)」から「患者に乗り越えてほしい(3)」とあって、あるいは「患者に認められたい(4)」思いから「思考(5)」し「実践(6)」していた。その結果、「解決・改善(7)」がみられ、「患者から感謝される(8)」、「嬉しい(9)」思いから派生して「実習前よりがんばろうかな(11)」と思い、「看護師になりたい(12)」さらに「勉強が必要(13)」とあったり「やりがいを感じる(10)」ことで看護師になることへの思いを高めたり、そのために必要な学習意欲につながっていた。

一方、実習前の「基礎看護学実習Iの経験(14)」から今回の実習では受け持ち患者を持つため患者と多く関わることを「学ぶ内容への期待(15)」としていた学生が、実習記録を「指示されてしなければならない課題(16)」と捉えている場合は、もっと患者と関わりたいのに記録をしなければならないと思っており、学生自らの気がかりや疑問が生じた場合と異なり、学生の思考の促進や思考から派生する実践へとはつながっていなかった。

② 指導者の言葉による思考の促進

また、前項の「思考(5)」の促進には、「師長の言葉(オリエンテーション、反省会)(17)」「看護師のアドバイス(18)」「教員のアドバイス(19)」によるものもあった。そうして「相手に合わせた介入(20)」によって「患者から感謝される(8)」喜びを感じていた。

③ 自分自身の看護実践に対する客観的自己評価

実習前から自分の周辺の間人間関係に変化があり、そのことと関連する本を読んで考えるなど「様々な人生経験からの気づき(アイデンティ確立中)(21)」があり、そこから自分が変わりつつあることを自覚していた学生もいた。そして「変化した自分が何を学べるの

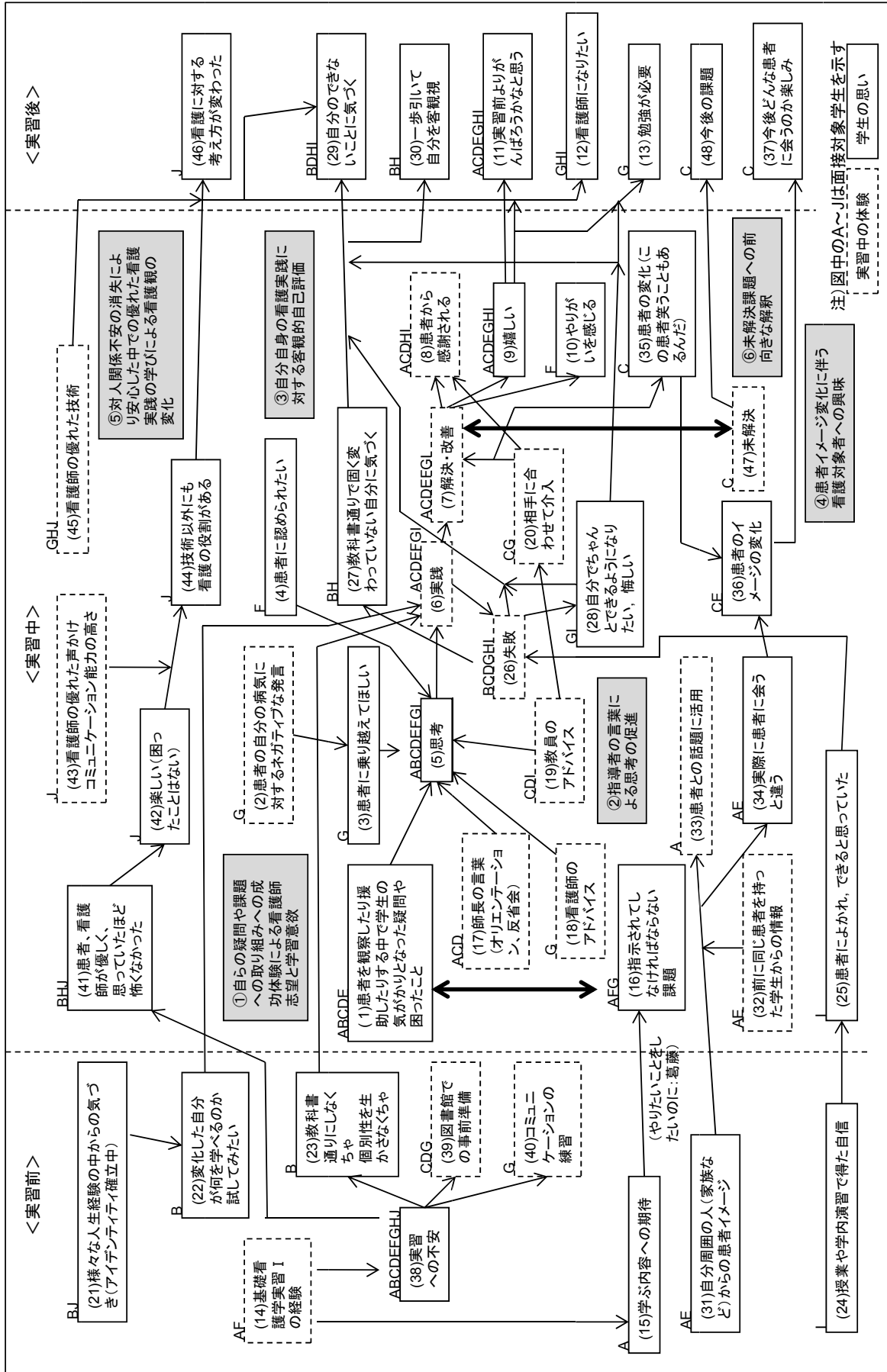


図 1 達成動機が上昇した学生の実習過程に伴う思い

か試してみたい(22)」と思う一方で、「実習への不安(38)」から「教科書通りにしつつ個性を生かしたい(23)」と思って「実践(6)」したが「失敗(26)」し「教科書通りで固く変わっていない自分に気づく(27)」ことになった。あるいは実習前に「授業や学内演習で得た自信(24)」から「患者に良かれと思い、できると思っていた(25)」が「失敗(26)」したことで「自分でちゃんとできるようになりたい、悔しい(28)」と感じ「自分のできないことに気づき(29)」,「一歩引いて自分を客観視(30)」する、あるいは「勉強が必要(13)」と思っていた。このように実習前に思っていた期待や見込みに反して成果がなかった体験に対して、自分自身の看護実践がまだまだ不十分であると振り返っていた。

④ 患者イメージ変化に伴う看護対象者への興味

受け持ち患者と会う前に年齢、性別、疾患などの情報提供を受け、「自分の周囲の人(家族など)から患者のイメージ(31)」を持ったり、実習した時期が後半だったために前半で実習した学生が同じ患者を受け持っていた場合には「前に同じ患者を持った学生からの情報(32)」も活用したりして「患者との話題に活用(33)」しながら患者と関わっていた。患者と関わっていく中で、それまで得ていた情報からは予想できなかった患者の別の表情を目にして「実際に会うと違う(34)」あるいは「相手に合わせて介入(20)」しているうちに、「患者の変化(この患者笑うこともあるんだ)(35)」と「患者イメージの変化(36)」が起き、「今後どんな患者に会うのか楽しみ(37)」と患者への興味を示していた。

⑤ 対人関係不安の消失により安心した中での優れた看護実践の学びによる看護観の変化

1年次の「基礎看護学実習Ⅰの経験(14)」から「実習への不安(38)」があり、実習前に「図書館での事前準備(39)」「コミュニケーションの練習(40)」など、不安解消のための準備をしていたが、実習が始まり「患者、看護師が優しく思っていたほど怖くなかった(41)」ことで「楽しい(困ったことはない)(42)」と思っていた。しかしながら、患者への「看護師の優れた技術(45)」とともにその際の「看護師の優れた声かけ、コミュニケーション能力の高さ(43)」に「技術以外にも看護の役割がある(44)」と「看護に対する考え方が変わって(46)」いた。このことはまた「看護師になりたい(12)」思いにもつながっていた。つまり、学生が自身の気がかりだった人間関係に対する不安がなくなり安心が得られると、さらに看護師の看護実践に着目し

て学びを深め、看護の捉え方が変化してきていた。

⑥ 未解決課題への前向きな解釈

実習中では学生が実施した看護で効果が表れず、「解決・改善(7)」に至らなかった「未解決(47)」の課題もあったが、これに対して学生は「今後の課題(48)」として引き続き考えていこうと思っていた。

6. 考 察

実習中に学生自ら抱いた疑問や課題に対して、思考し実践した結果、患者の問題が解決したり改善したりした場合は、患者に感謝され嬉しく思い、やりがいを感じ、実習前より看護師になりたい思いを高めていた。また、この体験は学習意欲の向上につながっていたが、それには看護師や教員による思考の促進も影響していた。しかし、この思考の促進には、学生が課題を指示されているために行っていると捉えている場合には促進されていなかった。このことは、看護師への動機を高めるためには、患者への看護が適切かどうかにかんして主眼を置いて指導者が指摘したり修正したりしすぎず、学生の関心事によく注目してそれに対する取り組みを見守る必要があるといえる。また、その関心事に対し、どのようにして学びたいのかにも着目する必要性があり、指導者は学習活動の促進のために提供している実習記録などの課題も学生が学びを深めるツールとしてどう捉えているかも確認しながらサポートする必要性が示唆された。

また、学生は、実習に入る前に自分の人生経験や実習前までに身につけた内容を実習で試したいと思っていたが、実践してみてそれほど成長していないと気づいたり、良かれと思って行ったことがうまくいかなかったりした。この状況を学生が客観的に分析していたこと、実習中には解決や改善が図れず、課題が残っていてもそれが今後の課題と捉えていたことは、学生が学習者としての現在地を客観的に評価し、今後につなげようと前向きに捉えている表れである。したがって、指導者は、学生の失敗あるいは上手くいかなかった体験に対して、学生がどう捉えているかの確認の必要性も示唆された。学生が看護実践した結果の善し悪しの評価だけでなく、各学生の人生経験や過去の実習経験から、自分の実践にどのような期待や不安を持ち、実践した結果とのギャップをどう受け止めているかも把握する必要があるといえる。

さらに、実習前にはそれまでの学生個々の人生経験

や過去の実習経験から患者のイメージを形成したり、実習への不安に対して自己学習などの対策準備をしたりしていたが、実習が始まり、患者や看護師との安定した関係がもてると不安が和らいでおり、看護師の実践に注目して看護観を深めていた。患者理解では、実習前や実習開始時に、学生の身近な人から患者像を想像したり、同じ患者を受け持った学生がいた場合には、そこから得た情報も活用したりして学生は患者のイメージ化を図っていたが、実際に患者と接してみて、当初持っていたイメージと異なる患者を知り、対象のもつ様々な側面を知り、患者を理解することに興味が湧き、さらに今後会う患者を理解することへの意欲につながっていた。したがって、指導者は、学生、患者、看護師の人間関係について、学生がどう受け止めているかを把握するとともに、患者理解の進行や学生が看護実践に集中して学ぶことを阻害する因子としての人間関係になっていないかにも注目して調整する必要があることを示している。

本研究で得られた結果を本研究と関連する先行研究からみてみると、①自らの疑問や課題への取り組みと効果の体験による喜び、②指導者の言葉による思考の促進、③自分自身の看護実践に対する客観的自己評価、⑤優れた看護実践の学びによる看護観の変化は、成人看護学における中間評価と達成動機に関する研究¹⁰⁾や実習における学生の達成感に影響する要因に関する研究¹¹⁾看護早期体験実習における学習経験に関する研究¹²⁾、アメリカでの看護学生や看護教員の看護教育ストラテジー（戦略・戦法）に関する研究¹³⁾でも部分的ではあるが似た要素があげられている。これらの達成感に関する学習・教育方法に関する先行研究でも似た要素があるということは、学生自ら生じる疑問や課題に対して取り組み学生が客観的に評価できるよう指導者がサポートし、その結果看護観にどんな変化が生じているかまで把握しながら指導することの重要性は、学生の達成動機を高めるよう実習過程を進める上でも大切であるということがいえる。

一方、本研究で得た結果の④患者イメージ変化に伴う看護対象者への興味と⑥未解決課題への前向きな解釈、については、関連した先行研究に見られなかった要素であった。したがって、本研究で得られたこの2つの要素が学生の達成動機を高め、前向きに看護職を目指す学習活動につながる要素と考えてよいかどうかは今後の検討課題である。

また、本研究で得られた結果が、達成動機の上がつ

た学生にのみに見られるのかどうか明らかにするためには、達成動機が上がりなかった（または低下した）学生の実習経過に伴う思いからも比較検討する必要がある。

7. 研究の限界

本研究は、一短期大学3年課程の学生10名をもとに調査したもので、結果の一般化には限界がある。また、本研究の面接調査では、実習前から実習後までの学生の思いを調査したが、実習3ヶ月前には実習の導入として教員がオリエンテーションを行い、また同時期より各学生は実習前準備として自主的に学内で看護技術練習を行っていた。こうした点は特に面接調査時に影響したと考えられる明らかなデータは得られなかったが、実習前の達成動機尺度の測定値への影響があったかどうかは不明である。今後はこの点にも配慮して明らかにしていく必要がある。

8. 謝 辞

本研究を行うにあたり、調査にご協力いただいた学生の皆様に深く感謝いたします。また本研究の一部は、日本看護学教育学会第19回学術集會にて発表した。

9. 文 献

- 1) Edgar L. Lowell: The effect of NEED for achievement on learning and speed of performance, *The Journal of Psychology* 33: 31-40, 1952.
- 2) 森田敏子, 松永保子, 内海 滉: 看護大学生の達成動機に関する研究—因子構造とその因子を規定する要因の検討3学年の比較から—, *福井医科大学研究雑誌* 1(1): 97-111, 2000.
- 3) 森田敏子, 松永保子, 浅本 憲, 松田好美, 内海 滉: 看護大学生の達成動機に関する研究—因子構造とその因子を規定する要因の検討—, *福井医科大学研究雑誌* 1(3): 447-467, 2000.
- 4) 東口和代: 燃えつきと動機との関連—看護を職業に選んだ動機を独立変数として—, *精神科看護* 26(5): 44-49, 1999.
- 5) 多鹿秀継: 教育心理学—「生きる力」を身につけるために—, 「3章 学習の動機づけ」, 東京: サイエンス社, pp. 41-60, 2001.
- 6) 渡邊知佳子, 野崎真奈美, 横屋智明, 田中美穂, 峰ヶ崎令子, 中原るり子, 竹内千恵子, 遠藤英子: 基礎看護学実習IIを体験した学生の初めての学び, *東邦大学医学部看護学科紀要* 21: 18-25, 2007.
- 7) 堀野 緑: 達成動機の構成因子の分析—達成動機 の概念の再検討—, *教育心理学研究* 35(2): 148-154, 1987.
- 8) 倉澤寿之: 心理尺度ファイル—人間と社会を測る—, 「2.

- 動機づけ・欲求」堀 洋道, 山本真理子, 松井豊編, 東京: 垣内出版, pp. 148—185, 1994.
- 9) 堀野 緑, 森 和代: 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因, 教育心理学研究39(3): 308—315, 1991.
 - 10) 鈴木はるみ, 澁谷貞子: 成人看護学実習における中間評価と達成動機との関連(その2), 桐生短期大学紀要16: 37—42, 2005.
 - 11) 佐々木順子, 橋本 忍, 山下久美子: 臨地実習における学生の達成感に影響する要因—半構造化面接からの検討—, 中国四国地区国立病院附属看護学校紀要4: 17—22, 2008.
 - 12) 浅井直美: 看護早期体験実習における学生の視点からみた学習経験, 桐生短期大学紀要18: 31—38, 2007.
 - 13) 山本裕子: アメリカで看護を学ぶ学生を動機づける方法と効果的な看護教育ストラテジー, 大阪府立大学看護学部紀要15(1): 23—29, 2009.

